
If・Cross Story

風紙文

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

I f ・ C r o s s S t o r y

【Nコード】

N 6 9 3 5 P

【作者名】

風紙文

【あらすじ】

自分が叶えたかったこと、それは異なる話の人物たちを合わせること

それを叶えるのがこの話 I f ・ C r o s s S t o r y
一つ一つは独立した話なのでどこから読んでも構いません。

知っている話も、知らない話も、どちらもが一つの話に収まる話達、
もしも繋がったらの話 始まります。

プロローグ

これは、自分の書く話の登場人物達が、もしも出会ったらどうなるか？

そんな出来事を書いていく物語となっています。

一つ一つは離れているようで、実はどこかでリンクして、クロスしている。

ひょっとしたら彼らは、偶然に出会っているかもしれない。

そして出会った彼女らは、こんなことになるかもしれない。

そう言った考えを書いていく

もしもこの話とこの話が繋がったら、の話

それが

もしも 繋がる 話
イフ・クロスストーリー

プロローグ（後書き）

徐々に書いていく予定ですので、もしもご拝読いただけたなら、感想を残していただけたら幸いです。

〈発明〉cross〈年齢〉（前書き）

記念すべき第1話は、オモイノタネ主体の話となっています。

〈発明〉cross〈年齢〉

年齢エレベーター

それは、都市伝説レベルの噂の一つ。

なんでもそのエレベーターは人により、更に年齢により見える場所、ある場所が異なるという。

範囲は国内と限られているが、年齢が変わるまでにで見つけられないとまた別の場所に移動してしまうそれを見つけることは、無理難題とされていた。

だがこの話があるのは、そのエレベーターに乗った人達からの話があるからだ。

そして、そのエレベーターに乗っていける所とは……自分の過去や未来と言われている。

例をあげるなら、15歳の人が30歳の自分になったり、90歳の人が10歳になったり等。

その人の心のまま、自分の願った年齢の時に、その時の自分で行くことができるという話だ。

もしもそんなものがあるのならば、そんな、神の発明のようなものがあるのならば、ぜひとも使ってみたいものだ。

「……本当にこんなところにあるの？」

「間違いないわ、アタシのリーダーに反応があるもの」

人気の無い路地裏、そこを一人の少女が歩いていた。

少女は誰かと話しているように会話をしているが、周りに少女以外の人を見つけれない。

だが、声の種類は二つ聞こえていた。

「……人の姿が見当たらないよ？」

辺りを見回して、少女は訊く。

「必ず人が持つてるとは限らないでしょ、つい最近知ったばかりじゃない」

「……それもそっか」

それに答えた声は、少女の持つ箱から発せられていた。電話口を通したような、機械じみた声だ。

「誰が箱か!」

「急にどうしたの?」

「いや、今、誰かに箱だ。って言われたような気がして」

「……いつも言われてる」

「そりゃそうだけど……あ、ここよ、エリ」

箱に言われ、エリと呼ばれた少女はある場所の前で立ち止まった。

「だから誰が箱か! アタシはナビゲーターよ!」

「さっきからどうしたの、ビーケ?」

「いや……幻聴かしら?」

「どこが悪い?」

「いいえ、全然正常よ。アタシはビーケ、『発明の種』というものからエリによって造られた。探し物はどこにあるのかナビゲーターよ」

「……やっぱりどこか変? 急に自分の説明なんて」

「いや、一応自分を説明しとこうかな、と」

「変なビーケ」

「それはもういいわ、とにかくここよ、ここ」

エリが立ち止まっているのは、古びた建物の前だった。もはや人は住んでおらず、廃墟と化した、元マンションのようだ。

「……ここに発明が?」

「確かよ、ここの一角に急に現れたの」

「……急に?」

「ええ、昨日まではなかったんだけど、今日急にね」

「今日……あ」

「どうかした?」

「ううん。なんでもない、行こ」

エリは建物の中に入った。

手に持つビーケが示す方向に進む、古びた階段を上り、あるところ
で、

「ここよ」

ある場所で止めた。

「……ココ？」

それはエレベーターの扉の前だった。

「中から反応があるの。誰かが置き去りにしたままなのかもしれな
いわ」

「……それは分かったけど、これどうやって開けるの？」

廃墟と化した建物のエレベーター、もはや電機は通っておらず、沈
黙している。当然、扉を手動で開けるのは酷だ。

「そこは頑張りなさい、アタシが手伝えるのはココまでよ」

「ぶう……ビーケのケチ」

「とにかく、ささっと回収しましょう」

「ぶう……」

ふてくされながらもビーケを床に置いて、エリはエレベーターの扉
に手をかけた。

「ん……」

力を込める。しかし開く気配は一切無い。

「ダメ、開かない」

しびれた手を振りながらエリが呟く。

「じゃあ、なんか扉に挟めそうな物を探すしかないわね」

「挟めそうな物……」

エリはじーっと、ビーケを見た。

「アタシは無理よ？」

「……だよ、ビーケ、箱だし」

「誰が箱か！」

「ナビゲーターは機械の箱だよ」

「うっ……確かにそうだけど……」

「まあいいや、何か棒でも……そうだ」

エリはポケットからあるものを取り出した。それはドライバーだった。たが普通のものとは異なり、先端は星形になっていた。

「これはどうかな？」

「壊れても知らないわよ」

「発明はそう簡単に壊れないよ」

エリはエレベーターに向き合った。

「あ、でもその前に、一個試してみよ」

「なによ？」

エリは指を伸ばし、

カチ

エレベーターのボタンを押した。しかも、車いす用の低い位置のを。

「いやだから、電気が通ってないエレベーターは反応しないわよ……てか、何でそっち押すのよ？」

「なんとなく？」

「疑問を疑問で返すんじゃないわよ！」

「うーん……開からないね」

「無視するなー！」

ビーケの声が廃墟に響いた時、

チーン

「え？」

「は？」

音と共に、エレベーターの扉が開かれた。まだ動いてるように電気がついていて明るく、その中に、

「おめでとうございまーす！」

一人の少女が居た。スーツとタイトスカートを身につけ、頭には帽子、居る場所も相俟って、さながら今に珍しいエレベーターガールのように見えた。

「えー、この度は『年齢エレベーター』の発見、おめでとうございます！」

「……何それ？」

いきなり現れた少女に、エリはビーケを拾い上げてから首を傾げた。「簡単にご説明しますね。このエレベーターは乗せた方を望んだ年齢の自分にお連れする物です。それに伴い身体は変化しますが、心はそのままですので、過去をやり直したいとか、未来を見てみたいという利用者が多いですね」

「……ビーケ」

「ええ……どうやらそのようね」

ビーケに声をかけた後、エリは少女を見た。

「な、なんですか？」

少女は慌てたようにあわあわし出した。よく見ると、服の胸の所にネームプレートがあり、ローマ字が書かれている。おそらく少女の名前だろう。

「単刀直入に言うわ、コレ、発明の種で作ったわね？」

「は……箱が喋った!？」

「箱って言うな！」

「ご、ごめんなさいい！」

ビーケの怒りに、少女は腰を抜かしてエレベーターの影に隠れてしまった。

「ごめんなさいごめんなさいすみませんすみませーん！」
ぺこぺこ頭を下げて謝り続ける。

「ちょ、そんなに謝らないでよ、まるでアタシが悪役じゃない」

「ビーケいけないんだー」

「エリは黙ってて」

「すみませんすみません！ 勝手に箱が喋らないって決めつけてす

みませーん!」

「やりづらいわね……エリ、後任せるわ」

「ん……」

エリはエレベーターの中に入り、腰を抜かした少女に手を差し伸べる。

「大丈夫?」

「あ、ありがとうございます」

少女を立ちあがらせた。

「それで、これは発明の種を使ったね?」

「あ、はい、名前は忘れてしまいましたが、発明の種から作ったものですよ」

「……そう」

「あ、あのー、それが何か?」

「……私は発明の種による発明を回収して回っているの」

「回収……ですか?」

「ん……だから、これを渡してほしいの」

エレベーターの壁を叩きながらエリが告げた。

「え……」

それを聞いた少女は、

「えーーーーー!」

甲高い声で叫んだ。

「……」

エリは思わず耳をふさいだ。

「むむむ、無理ですよ! コレは渡せません!」

「なんで?」

「だ、だって、これはわたしが造ったもので、憧れの夢を叶えてくれるものなんです!」

「……それは分かってる。発明の種は人の願いを叶えてくれるものをなんでも造り出す。だから危ないものが造られる前に、回収している」

「こ、これは危なくないですよ。ただ人の年齢を変えるだけのものですから」

「関係ない、渡して」

「む、無理ですよ、エレベーターを渡すなんて」

確かに、建物に取り付けられたそれを渡すというのは不可能だ。

「……大丈夫、どこかにあるネジをこれで回せばいいから」

エリはドライバーを持ち上げて見せた。

「ね、ネジですか？ さ、さあー、そんなの見たこと無いですねー」
言いつつ少女は壁伝いに移動して、止まったところで両手で何かを隠すように腰の後ろに持っていた。

「……そこだね」

「な、なぜそれを！？」

「いやまるわかりだから」

今まで黙っていたビーケがツツコミをいれる。

「さ、さすがは喋る箱さんですね」

「だから箱って言うな！」

「す、すみませーん！」

「……渡してもらおう」

一歩ずつ少女へと近づくエリ、それを見る少女は、

「あわわ……こ、こうなったら……」

服のポケットに手を入れ、

「これ、読んでください！」

一枚の折りたたまれた紙を取り出して突きつけた。

「……？」

首を傾げながらもエリは紙を受け取り、

「……持ってた」

ビーケを少女に渡して、紙を広げて読み始めた。

「あなたも発明さんなんですか？」

「そうよ、探し物がどこにあるのかナビゲーターよ」

「ほえーこんな発明さんもあるんですねー」

「アンタのこれだってそうでしょ？　　いったいどんな願いを持った
らこんなのが出来んのよ」

「わたしは…二つの願いがあったんですよ。エレベーターガールに
なりたいてのと、色んな年のわたしに会ってみたいというのが、
それでどっちなかって選べなかったら、こんな風になったんですよ」

「へえー、なんでこのご時世にエレベーターガールなのよ？」

「それは…内緒です」

「……なるほど」

紙を折り直し、ビーケと交換で紙を少女に渡した。

「よく分かった。これは回収しない」

「ちょ、エリ、それ本気？」

「ん……これはもはや発明じゃない、都市伝説の一つ」

「都市伝説う？」

「……だから、これは回収しない」

「あ、ありがとうございます。このエレベーター、送ったきりの人
がまだ何人も居るので回収されるのは勘弁だったんですよ」

「……これからも、頑張ってるね」

「は、はい！　ありがとうございます！」

「…で、結局回収せずに来たけど、あれでよかったのね？」

「ん……もはやあれは発明じゃない」

「都市伝説の一つ、でしょ？　　いったい何を読まされたのよ」

「……ところでビーケ」

「アタシの質問はスルーですか。で、なによ？」

「……今日ね、誕生日なの」

「誕生日？　　いったい誰の？」

「ビーケの」

「へーアタシの……あ、アタシの！？」

「そ、だからあのエレベーターが現れたの」

「え？　ちょっと待って、情報が多すぎて理解が追いつかないわ」
「多分、来年にはまたどこかに行っちゃうんだろうね」

「え？　今日アタシの誕生日？　今日アタシがエリに造られた日？
だからエレベーターが現れた？　なにをどうしたらそれが繋がる
の？」

「……そっか、そういう出会いもあるんだね」

「ちょっとエリ！　どういう意味かちゃんと説明しなさいよね！」

「ん……了解、でもその前に……」

「な、なによ？」

「誕生日おめでとう、ビーケ」

「う………あ、ありがと……」

く精霊くcrossく迷路く(前書き)

第二話、精霊と迷い路話の、ある一つの繋がります。

〔精霊〕cross〔迷路〕

今は授業中、先生の黒板への書き込む音が説明の声が音源になるのが当たり前の時間だが、今この空間に限っては、生徒達のひそひそ話がそれを担っていた。

正直言って、耳障りだ。ひそひそというところが特に、話すならどうと話してくれればどうってことないが、ひそひそとなると耳に入ってくる言葉は、耳に障る。

当たり前だが、授業中だからのひそひそだ。それを先生が止めないのは止められないのが分かっているからなのだが、俺にとっては、なんとしてでも止めたい事だった。

かと言ってどうすれば止まるのか。それにおいて俺へのクラス内評価が下がるのは避けたい。

……仕方ない、面倒だが、いつもどうりのこれしかないな。

筆箱に手を入れ、一本のペンを取り出す。キャップを外し、ノートの角に円を書き、中に線を書き連ねていく。

ものの十秒で書き終え、その真中を、トン、と叩いた。

するとどうだろう、周りから聞こえていたひそひそが一切耳に入らなくなった。

先生の音が音源になり、普通の授業風景が戻ってきた。

ひそひそと話す人たちが、変わらずに話し続けているながら。

それから数十分して、チャイムが授業の終了を告げた。

「はい、じゃあ今日はここまで」

先生が終了を告げると、ひそひその声が、がやがやになって俺の耳にも届くようになった。

ふむ、やっぱチャームをスイッチにするのは正解だな。
とりあえず、休み時間。しかも昼休みだ。

俺は席を立ち、廊下へと出た。

購買でなんか買って、あいつ等の所に行くか。

とか思っていると、妙なやつを発見した。

なんだアイツは？

まず格好がおかしい、縦線やら横線の入った、まるで迷路でも書かれているような服に帽子。

そんな奴が制服一択の高校に居たら目立つだろ？

ソイツは生徒に話しかけている。今終わったのか、生徒が去っていた。

するとソイツはこちらへと歩いてきて、俺と目が合った。

「ありゃ？　もしかして見えてる？」

妙な事を言うな、

「当たり前だろ、さっきの男子にも見えてたろ」

「むう…まさか一般人に見つけられるなんて、まだまだ修行が足りないね」

何言ってるんだコイツは……あ

「もしかしてお前、アレか？　幸せに迷いましょう。ってやつ」

「そーでーす♪」

言うなりソイツはピースサインを向けてきた。

「名前は確か……まあいいか。今の男子、そうなのか？」

「もちろん♪授業中のひそひそが耳障りなんだってさ」

俺と同じ考えの持ち主だったか。

「……で？　なに渡した？」

「それは言えないね♪でもちゃんと使えばゴールに行けるんだよ」
ちゃんと使えば……ね。

「確率は？」

「さあ、使った事ないし」

手のひらを上にあげてふるふると首を振る。

「……はあ、まあいいや、俺達には関係ないし。ほどほどにしろよ」
「もちろん♪……と言いたい所だけど、もしもしちゃったら、どうする？」

「そのときは……俺がゴールに導いてやるよ」

「えー、そんなの反則だー、チートだー」

ぶーぶーと駄々をこねる。

それを見た俺は、

「……お前な」

「え？」

ダン！

壁際に追いやり、右側の壁を叩いた。

「さっきも言ったが、ほどほどにしろよ？ その気になれば、お前だって簡単なんだからな？」

左手に持ったペンを向けて言った。

「……はい、分かってますよーそういう人は行かせないませーん……コレでいいの？」

言い方が癪に触るが、

「……絶対守れよ」

俺は解放した。

「はーい、そんじゃねー♪」

ソイツは去っていった。

分かったのかは分からんが、仕方ない、信じてやるとしよう。

これで、あいつ等が迷うことは無くなった筈だし、迷ったとしても、路には入らないだろう。

「おーい、黒石」

俺を呼ぶ声、振り返ると、

「こんなところでどうしたんだ？」

「なんでもない、ちょっと迷路から人を抜けださせてた」

「はぁ？ お前も相変わらず分からん奴だな」

「お前には負けるよ、晶」

「まあいいや、早く購買行こうぜ」

「あぁ」

迷路に迷わない方法、その一つ。

それは迷路に入る前に、それを止めさせることだ。

く色くcrossく景品く(前書き)

第三話、オモイノカタミビトが始まる少し前のお話

～色～cross～景品～

「……朝か」

目を開けると、朝日が目にしみた。

えっと……今日本業の方は無いか。

なら、今日もまた、あちらの仕事に向かうとするかな。

一応、本業の支度を整えて、俺は家を出た。

H o t e l A i l e

エルは確かフランス語で「翼」何故こんな名前かは知らないし、何をしている場所かも詳しくは知らないが、この20階が、俺が副業として働いている会社がある場所だ。

いつも通りエレベーターに乗る。

すると、向こうから一人歩いてくる人が見えた。

開ボタンを押して少し待っていると、案の定乗ってきた。

「……ありがとうございます」

「ああ」

礼を言われたので、返しておく。

「何階だ？」

初めて見る顔だ、まさか20階じゃないだろう。

「……屋上まで」

屋上？

「このエレベーターは30階までだぞ、屋上にはそこから階段だ」
ここで働いてる人なら知ってると思うが。

「……では、そこまで」

俺は30階のボタンを押し扉を閉めた。

少しの浮遊間の後、エレベーターは上へと上昇を開始した。

「……」

「……」

静かだな、いつも一人で乗るからそれが当たり前だが、珍しく他に乗客がいて静かなのは何やら違うな。

ふと、後ろ目に乗ってきた人物を見る。

黒のワンピースを着た女だ。何やら雰囲気は暗く、髪はまるで今さっき切ってきました、といった感じのショートカットだ。

ずっと下を向いている為に表情は伺えないが。俺は本業の関係上、そういう人によく会うのでなんとなく分かる。

多分あいつ、失恋か何かの大きなショックを受けてるな。

ああいう奴に限って、色んな事するんだよな、

例えば、自殺とか……

チン

エレベーターが20階で止まり、扉が開いた。

俺が降りると、女性は閉ボタンを押して扉を閉めさせた。

そのままエレベーターは上昇を再開させていった。

「……」

もしかしてあいつ、このまま上に行って……

「……はよ」

いつの間にか、隣には空がいた。

「……お前はいつも変わんねえな」

「？」

あの女性には、表情と呼べるものがうつすらとしかなかったが、ここに居る空よりはあった——筈だ。

だが今のあの人には、まるで表情と呼べるものが、一つしか見られなかった。

その表情とは……いや、それをここでも言っても仕方ないな。

ただ、俺が言うのも何だが……自殺はしてほしくないものだな。

く色くcrossく景品く(後書き)

という感じで、If・Cross Story 3話連続投稿となります。

次回は未定ですが、おそらく年末には更新しようと思います。

それでは、

感想及び評価、お待ちしております。

く欲罪くcrossく精霊く(前書き)

第4話目、実は結構苦勞していたんだね、な話。

〈欲罪〉cross〈精霊〉

「不思議検索ダウジングマシン！」

じゃきーん！ 高々と手作りしたダウジングマシンを掲げた。

私の趣味、というか日課に、不思議を探す。というのがある。

それを見つける為に作ったのが、この不思議検索装置ナンバー6、不思議検索ダウジングマシンなのですよ！

それについて先日、これで不思議を見つけたばかりで効果は実証済み。だからコレに従って行けば不思議に出会える筈だよね。

という訳で、今日の放課後もダウジング両手に不思議探しを始めます。

まずは360°回り、反応のあった方へと進む、曲がり角を右に、左に、また左に、左に……おお！ 反応が強くなった。

この先には……あれ？ あそこに誰か居るけど、しゃがんでなにしているんだろう？

「しかし、記憶を無くす方法ね……」

そんなの簡単に出来たら正体隠すのに苦労してないっての。

まあ自分で言い出したからな、とりあえず、適当に書いてみよう。

俺はペンを取り出し、地面に色々と書き始める。ここは車通り無し、人も滅多に通らないだろう。

へたに部屋で書いてると品に見つかるから、後、別のクラスメイトや学校の人に見つかるのを避ける為にわざわざ隣駅の住宅街まで来たんだが、正解だったな。

さてと……記憶の消去、いや、記憶の操作でいいな。でもどう書けばいいんだよ記憶なんて。

基本的に静寂とか、空間とか、スイッチぐらいしか使わないし。

「はぁ、どうすっかな」

あ、いつの間にか道いっぱい書いてしまった。

まあいっか、誰にも見られてないし……

「なにやってるんですか？」

「!？」

思わず飛び退いて、後ろを見た。

あの制服は、この辺りの高校のやつか、とりあえず同じ学校じゃなくて安心した。

しかし、こいつ何者だ？ 手にダウジング……明らかに手作りなの持ってるし。

それに、何か人じゃないような雰囲気もかもち出してる。

見た目だけなら、学校に一人は居る？ 生徒に違いなんだろうけど。

いやそれはもういいや、問題なのは、この状況を見られた事だな。

『なにやってるんですか？』って訊ねられて。『記憶を消す方法を考えてます』なんて応えてみる、どんな顔されるか分かんないぞ？ まさか『不思議はっけーん！』なんて言って目をキラキラと輝かせる訳……それはそれでキツイが。

『へ、へえー……』とか言われておかしい人見る目で見られるならまだいい。

問題は、『は？ なにそれ？』とか言われてバカにされるのが一番ダメージだろう。

なんとか打開策を……

「え、えっと……」

この人いったい何してたんだろう？ 隣駅の高校の制服だから高校生だろうけど、わざわざ隣の駅まで来て道いっぱいに絵を書くなんて。

「実はね……」

なんなんだろう、このへんてこな絵。丸の中に線やら点やら円やら

色々書かれてる。

例えるなら、魔方陣、みたいかな？

てことは……もしかしてこの人、魔法使い！？

「絵を書く練習をしてたんだよ！」

「……へ？」

絵を書く……練習？

「練習、ですか？」

「そ、そうなんだ。ちょっとした部活の練習でね」

ほえ、変わった部活があるんだな。

「でも、なんでわざわざこんなところで？」

道ぐらいなら向こうにも普通にある筈なのに。

「そ、それは……ほら、部活の仲間に見つかりたくないからだよ、

目の届かないところで練習して、皆を見返してやろうとね」

「ほえ」

美術部みたいなもののかな？

「さ、さてと、そろそろ僕は帰るとするよ、それじゃあ」

男の人は立ち上がると、そそくさと去っていった。しまった。

「……なんだったんだろ、今の人」

ダウジングが反応してたし、なんだか妙な気配も感じたし、もしか

して本当に魔法使いだったのかな？

だとしたら……

「不思議はっけーん！」

私は目をきらきらさせながら、ダウジングをじゃきーん！ と高々

と上げたのだった。

「ふう……どうにかなったな」

まさかあんな嘘を信じてくれるとは思わなかったが、結果として正体がバレずに済んだんだ。ならそれで問題無しだ。

さてと、もう一つの問題も、今みたいに簡単に解決してくれないかね。

く剣くcrossく材料く(前書き)

第5話目、このサイトには投稿していない話ですが、ここにも繋がりとあるということを。

く剣くcrossく材料く

「大和先生」

「先生、呼ばれてますよ」

「ん？」

先生が振り向いた方向を見ると、2人の生徒がこちらへと歩いて来
ていた。

片方は制服を見るに一年生の女子だ。もう片方も女子、確か同学年
の筈だが、名前は分からない。そもそもクラスが違うから話したこ
とがない。

「どうした？ えっと……」

先生も名前を忘れているみたいだ。いいのか先生。

「一つ連絡が……先客ですか？」

名前を言わないことを気にせず、女子は俺を見た。

「おや、武川じゃないか」

あちらは俺の名前を知っていた。

「よう、俺の用事はもう終わったぞ」

実際は嘘だ。だが他の生徒に聞かれてはまずい話だから先に済ませ
てもらおう。

「そうか、では大和先生、少しお耳を拝借」

言うなり大和先生と共に俺達から離れて小声で話し始めた。あちら
も聞かれてはいけない話みたいだな。

「あ、あの……」

一人が先生と話しに行ったため残った一年生が俺に話しかけてきた。

「部長とお知り合い何ですか？」

部長？ あいつ部長だったのか。

「一応、同学年だ。俺は武川創矢。まあよろしくな」

「は、はい」

女子も自身の名前を言った。珍しい名字だった。

なんというか、この学校には三文字の珍しい名字を持つ女子が多いようだな。

「それでは、その手筈でよろしいですね」

「おう、それで頼むぜ」

先生達が戻ってきた。

「ではな、武川。七ヶ橋女子にもよろしく言っておいてくれ」

女子は手を軽く上げて去って行った。一年生もぺこりと頭を下げてから後に続いた。

てか、なぜあいつはそれを知っている。

「なるほどなー、やっぱ材料部にも顔出さないとイケないか」
材料部？

「なんですかそれ？」

「文化系部活の一つだ。さっきのが部長でな、俺掛け持ちで顧問やっ
てんだよ」

どんな部活なんだよそれ。まあ人のこと言えない部に入部してるけど。

「という訳で、俺は材料部を見てくるから三夜子達に遅れるって伝え
ていてくれ」

「はい」

大和先生を見送ってから、ふと考えた。

材料部なんて聞いただけじゃ内容が分からん部活、この学校には、
まだありそうな気がするな。

ゝ発明ゝcrossゝ迷路ゝ（前書き）

第6話目、ついにこの二つが繋がる時が

「発明」cross「迷路」

これは、ビーケが急に察知した反応が始まりだった。

「あれ？」

「どうしたのビーケ？ 道に迷った？」

「ナビゲーターが道に迷ってたら話にならないわよ、違うわ、なんだか妙な反応があるのよ」

「……発明の？」

「どうなんだろう……アタシに見つかってことはそうなんだろうけど、なんだか違うのよね、こう、気配が薄いというか」

「……？ よく分からないよ」

「それはコッチの台詞よ、あ、動き出したわ、追ってエリ」

「うん」

ビーケが示す方向へ歩き始めた。

「この辺よ」

そこは特におかしな所の無い通りだった。ただ一つ妙と言えば、人が私意外見当たらないところだ。

「距離にして六メートル以内ってところね」

「それ、この辺って言える距離じゃないよね？」

「仕方ないじゃない、反応が薄すぎて見つかりにくい……え？」

「……どうしたの？」

「反応がはっきりあったわ、右よ」

言われた通り右を見ると、

「あ……」

少し向こうに、人が倒れていた。その手からこぼれ出たと思われるものに、発明の証を見つけた。

「……何があったんだろう」

発明を拾い上げながら考える。

そもそも、この人はいったいどこから現れた？ さっきまで人の姿を一つも確認出来なかったのに、この人が倒れているのを見つけるまでビーケがちゃんと確認出来なかったのもある。

まるで、どこか別の空間にでも居て、ここに現れた。そうでもない
とこれを証明出来ない。

「……いったい、何が」

「教えてあげよっか？」

「……？」

倒れている人の向こうから声。見ると、声の主と思う人が歩いてきた。

妙な格好をした、多分、私と同じ年ぐらいの女の子だ。

「エリだってはたから見たら妙な格好よ？」

「こんな時に妙なところだけ心を読まないの」

ビーケに言っていると、女の子は倒れている人の前でしゃがみ、指でさして、

「この人は迷路にゴール出来なかったんだよ」

と言った。

「……迷路？」

「そ、幸せに迷った人が陥る路。略して『迷路』」

「迷路……」

聞いたことがある。つい先日、発明を探していた時、

『ねえねえ、迷路って話知ってる？』

『迷路？ なにそれ？』

と会話してる2人組を見た。なんでも、

『幸せになりたくて迷ってる人の前に現れて、その幸せを叶えてくれるアイテムをくれるんだって』

とか、

『でもね、そのアイテムを持った瞬間から迷路って迷路に入れられて、路を間違えると死んじゃうだってさ』

と言っていた。

でも、それは迷路だ。この女の子と何の関係が？

「それで、その『迷い路』の入り口案内人が、この私なのですよ♪」
女の子はピースサインを私に向けて笑った。

「アナタは私を知らないだろうけど、私はアナタを知ってるよ」
え……？

「『発明の種』による発明を集めてる人、だよね♪」

「……どうしてそれを？」

「私のリーダーの情報だよ♪要は私達と同じような者がいるから。
会ったら挨拶しときなさいって」

「……挨拶？」

「そ、という訳で、こんにちは♪」

女の子は頭をぺこりと下げた。

「……あ、ども」

私も慌てて返す。

「ちょっとエリ何返してんのよ」

「おー、アナタが噂のおしゃべりナビゲーターさんのビーケさんだね？」

「あ、アタシの名前まで知ってるなんて……」

「良かったでしょ？ 初見で箱だって言われなくて」

「誰が箱か！」

「きゃー！ 生で聞いちゃった！」

ビーケの怒鳴りにきゃあきゃあ騒ぎだした。

「っ……なによコイツ、やりにくいわね」

女の子は一頻り騒いだ後、

「とにかく、私達とアナタ達は似て非なるもの。互いに必要以上の
干渉はしないのが決まりなんだよ」

「……」

「とか言いながら思いつきり話しかけてる。とか思わないでね？」
その通りだった。

「この状況は仕方なしなんだよ、路に入った人が、発明を持っていたから」

「……その人は、どうなったの？」
「いまだに動かない人を見て訊く。」

「行き止まりに到着して、死んだよ」

「！」

「そんなあつさり……」

「ちょっ！ 死んだってどういうことよ！？」
ビーケが声をあらげる。

「人は正しい路だけを進めば何にでもなれる。ただ人は全ての選択に正しい路を選ぶ訳じゃない、正しい路が見えない場合だってあるからね、そして路を間違えに間違えて行き着く先は行き止まりという名前の死。それを私達が小さくしたのが迷い路なんだよ」

「つ……だからなんだってのよ！」

「……行き止まった」

「え？」

「その通り♪さすがだね」

「ぱちぱちと拍手を送られた。」

「この人は間違え過ぎて行き止まりについた。だから死んだんだよ」
女の子は倒れて……いや、死んでいる人から何かを取った。

「全く、有名すぎるからって気配を消したいなんて、それで発明を作って路にも入って、結果死んでちゃ本も子もないよね？」

「……」

「発明だけならまだ良かったのに、やりすぎだったよね？」

「……」

「順番が逆だったらまだ良かったのにね、路に入ってから発明が出来れば、こうはならなかったもんね？」

「……」

「ぶー、何か言ってよー」

「……その人は、どうなるの？」

「ん？ ああ大丈夫、ちゃんと元あったところに置いてくるから」
「……元あった？」

「この人ね、ここからだいぶ離れたところで死んだんだけど、それから発明を持ってるって分かったの。で、これをアナタに届ける為、私は来たってわけ」
「そうだったのか……」

「さてと、発明渡したし、一頻り遊んだし、私そろそろ行くね」
「え……？」

「心配いらないよ、私達はアナタを路には引き込まない。そうリ―ダーに言われてるからね、そして今みたいながあつたらまた渡しに現れるから♪」

「……」

「それじゃあそろそろ……そだ、最後かもしれないからお互い自己紹介しようよ♪私は――――」

「じゃあねエリさん、ビーケさん、また会えたらいいね♪」

互いに名前を言うと、女の子は人と共に消えてしまった。

「……」

発明だけでは叶えられない願いがある。それを思い知らされた。

「それだけ、人は欲求が多いってことね」

「うん……」

「どうしたのよエリ、さっきの奴が気になるのは分かるけどさ、アタシ達はアタシ達のやることをこなせばいいのよ」

「……うん。そうだね」

「そうと決まったら、早速次行くわよ」

「……うん」

私達はその場を後にした。

人を助ける発明があれば

人を迷わす路がある

おそらく、他にもいろいろとあるんだろうな、と私は思った。

そして、それは本当に、私はそれらと出会うことになった。

〈発明〉cross〈迷路〉（後書き）

この話は、ある方からのリクエストの元、執筆した話です。
やはりあの二人はどこかで会っていてもおかしくはないですよね。

感想、お待ちしております。

く喫茶くcrossく発明く（前書き）

久しぶりのIf・Cross Storyにして、新たな展開となります。

〈喫茶〉cross〈発明〉

カランコロソ♪

「ありがとうございましたー！」

お客様を見送ってからわたしはマスターのところへ、そこには出来上がったメニューと届け先の書かれた紙があった。

「はい！ ココアさんと、クールさんにですね！」

両手に品を持ってお二人のところへ、

「お待たせしましたー！ ホットココアと、アイスコーヒーです！」

「ああ、ありがとう」

「ありがとね」

「いえいえ、ごゆっくりどうぞー！」

マスターのところへ戻る。今のところ出すメニューは無いみたい。ふう〜、やっと一息つけるよ。

ここは小さな喫茶店。

寡黙なマスターと、わたしを含めたアルバイト3人の、計4人で成り立っているこのお店、モットーは、『常連さんに優しく』です。

別に一見さんをお断りしてる訳でも、常連にならなければ優しくしないという訳ではないんですが。常連となってくれた方には、少しサービスするのですよ。

でも、幾人ものお客様が出入りする喫茶店ですから、常連さんを覚えるのが大変だったりします。

そんな時に、わたしはある方法を思い付いたのです。

それは、常連さんにアダ名をつけること、例えばさっきのホットココアは頼んだ方は来る度にココアを注文するので、ココアさん。

アイスコーヒーを頼んだ方は、毎回注文はばらばらだけど、必ず冷たい飲み物を頼むので、クールさん。

このように注文の特徴で常連さんを読んでいます。もちろんわたしが勝手に解釈のつづけているので、本人はそれを知りません。そんなこの喫茶店ですが、良く変わった人が来るのです。例えば……

カランコロン♪

「あ、いらっしやいま……せー」

今日やって来たのは、全身灰色っぽい服を来た女の人でした。最初見た時はちょっと驚いて言葉を途切らしてしまったけど、お客様にはしっかり接待しないと。

女の人は一人だったので、カウンターにお通しした。コップに水を入れて持っていく。

「いらっしやいませー!」

まずはいつも通りの明るい挨拶、

「お決まりになりましたら、こちらのベルでお呼びください」

ご注文方法という定型詩を言って、後は「失礼します」と言って離れる。

よし、完璧!　と思っていたら。

「……ナポリタンと、アイスティー」

女の人は注文を言った。まだメニューを開いてないのに、壁にかかったメニューだけで選んだらしい。

「え、えっと」

虚をつかれたわたしだが、

「アイスティーはミルクとレモン、どちらになさいますか?」
ちゃんと決まり文句を言いました。

「……ミルクで」

「かしこまりました」

わたしは注文を復唱してからマスターのところへ、オーダーを言った後、再び何もやることなくなった為か、つい、女の人の方を見

てしまった。

「……この辺りにあるの？」

「……………」

「……確かにね」

何やらお話ししているみたいだ。でも周りには誰もいない、電話かな？ 悪いかと思いますが、聞き耳を立ててみる。

「それにしても、なかなかいい店じゃない」

「……うん」

おお、お褒めの言葉を頂きました。

もう片方の声は、やっぱり電話だろう、受話器を通したような声が聞こえたし。

でも電話にしては、よく聞こえるな。

少しして、女の人の注文したものが出来上がった。お盆に乗せて、持っていく。

「お待たせしました。ナポリタンと、アイスティーです」

一つずつ置いていく、そこでふと、カウンターに置かれている黒い箱のような物が目に入った。

元から無かったし、女の人の持ち物なんだろう、黒い弁当箱みたいな箱が置かれていた。

「誰が箱……」

「……ありがとう」

今、箱から声が聞こえたような……でもその声は女の人の声に遮られてよく聞き取れなかった。

「ご、ごゆっくりどうぞ」

謎は解けぬまま、わたしはそこを離れた。

でもやっぱり気になり、再び耳を傾けてみた。

「……ダメだよビーケ」

「悪かったわ、ついカッとなって」

「心読むの止めればいいんじゃないの？」

「出来たらしてるわよ、でもアタシを見た人の心は意志に関係なく読んでしまうの」

「大変だね」

「対したことないわ、なぜなら…」

「アタシはナビゲーターだから」

「ちよっ！ エリ！」

「静かにしてね、周りから妙な目で見られるから」

「……もう遅いと思うけどそれを気にするのね？」

「うん」

「……」

やっぱり、片方の声はあの箱から聞こえてる。電話には見えないし、なんだかナビゲーターとか言ってたけど……アレは何なんだろう？

「おや？ アレは……」

この声は……

「どうかしました？ マスター」

マスターが喋った。これは珍しい。

「なるほど、そういうことですか」

「？」

なんだか納得してるみたいだけど。

するとマスターは、カウンターの向こう側から女の人に近づいた。

マスターの知り合いなのか？ とっても気になるので、そっと耳を傾けてみる。

「そうですか、彼等は夢を叶えたのですね」

「……一応は、ですが」

「そのせいで今のこの状況なんだけどね」

「ふふ、ですがずいぶんと親孝行なのです。その為に全国を歩き回るとは」

「……私は、私の夢は自分で叶えたいから」

「なるほど、私も自らの夢を叶えるために努力し、こうして自分の店を持つことが出来たのです。貴女の夢も、いずれ叶いますよ」

「……ありがとうございます」

「こちらにはいつまで？」

「……この辺りのを全て見つけ次第には……」

「おお……」

あのマスターが、あんなに話すなんて……実はあの女の人、常連さんなのかもしれない。きつとわたしのシフトじゃない時によく来てるんだ。

となれば、早速あだ名をつけなくては……とは言うものの、判断材料が少なすぎるからな……

「うーん………あ」

そうだ、コレにしよう。

カランコロン♪

「ありがとうございますー！」

女の人の会計を済ませ、見送った。

わたしはマスターのところへ行き、訊ねる。

「あの、マスター」

「はい？ 何ですか？」

「今の女の人、もしかして常連さんですか？」

あんなにマスターが親しく話していたんだ、きつとそうに違いな……

「いえ、あの方は今日初めていらしたのですよ」

「え？ でもマスター、あんなにお話してましたよね？」

「ええ、あの方は過去に会ったことがありますね」

マスターは教えてくれた。マスターは、あの女の人、両親と知り合

いらしく、まだ小さい頃に何度も会っていたそうだ。そしてその面影を見つけたマスターが女の人に声をかけると、案の定、その人だったと。

「かれこれ、もう十年近く会ってませんでしたけど、どこことなくあの2人に似ていたものですから」

「へえ、マスターのお知り合いの娘さん。ということですね」

「ええ、彼女はもうしばらくこの辺りにいるらしく、またこちらに来るそうですよ」

「ということは、カイワさんも常連さんになると……あ」
しまった。言ってしまった。

「ふふ、またいつものあだ名ですか？」

「あ、あはは、はい」

あの女の人、食事の時以外は必ず、箱やマスター等、誰かと話していた。

だから、あの人のあだ名はカイワさん、に決まりなのですよ。

「ふふ、きっと彼女も喜びと思いますよ」

「ありがとうございます。マスター」

カランコロン♪

「あ、いらっしやいませー！」

喫茶店には、今日も人が集う。

〈喫茶〉cross〈発明〉（後書き）

今回のお話に出てきた喫茶店。これは、元となる話が現段階ではありません。

そのため、ここ、If・Cross Storyで多く出てくる予定です。

もっとも様々な人が集う場所。それが喫茶店。

感想お待ちしております。

〈喫茶〉cross〈精霊〉（前書き）

喫茶店連続にして、第2弾。今回の店員は少々癖モノ？

〈喫茶〉cross〈精霊〉

カランコロソ

「ありゃあとうござーしたー」

お客を見送ってからマスターの方を見ると、注文の品は無い。

よし、休めるぞ。

「はあ……」

思わずため息、そりゃため息も出るさ、シフトじゃ無いのにバイトしてんでから。

「えーと……」

アタシは首にかけている懷中時計を見た。最後に見た時から、長針は一步しか動いてない、要は一分が経過しただけか。

「ちっ……」

あ、因みに何で懷中時計かけてるかと言うと、目が悪くて腕時計が見えないし、バイト中に携帯は開けないからだ。

「……はあ」

もう一度ため息。

ったく……こうなったのは里桜のせいだ。

急に、『ごめん！ 補習で遅れそうだから少しだけ代わって！』とか言いやがって。頭悪いの分かってんだから補習の日にバイト入れるんじゃないっての。

……まあ、困った時はお互い様だよ

……とかアイツがほざいた時は、携帯じゃなかったらひっぱたいてやったのに。（まあ、来たら絶対にひっぱたくけど）

あのセリフは、助ける側の奴が言う台詞なんだよ。

……まあ、ちょうど暇してたから友達に誘われて遊びに行こうかと

してたところだけど……まあ、金使うよりは稼いだ方が良かったから……

「……………ちっ」

さっさと補習済ませて来いよ、里桜。

「……あ」

マスターのところに注文の品が置かれている。

ふう、もう休憩終わりか。

注文を持ってお客のところへ、

「お待たせしました。チーズケーキと、メロンソーダです」

「ありがとう」

「ありがとう」

「ごゆっくりどうぞ」

さっさと置いて戻った。

そういやあの2人、よく来てるな。確かり桜が常連特有のあだ名つけてたはずだ。

えっと、チーズケーキの人はいつもチーズケーキだから、チーズさん。メロンソーダの人は、いつも炭酸だから炭酸さん、だったっけ？（後の方言いづらないな）

とにかく……………ちっ、まだ40分はあるか。

ここって時給が良い上に徒歩で来れるから選んだけど、まさか知り合いがバイトしてるとは思わなかった。しかも、マスターの娘がここでバイトしながらアタシ達と同じ学校に通ってる同学年。どれだけ顔見知り多いんだよ。

カランコロン♪

ドアベルが鳴った。お客が来たか。

「……………いらっしやあせー」

カランコロソ♪

「ありゃあとぅござーしたー」

今出ていったことにより、店の中にお客がいなくなった。

ふむ……残り、11分。このまま誰も来ないで時間が過ぎれば……

カランコロソ♪

……来たか。

まあいいや、時間的にこのお客で最後、あるいは出ていく前に代わりが来るし。

「いらっしやあ……」

……おや？

「あ、西金だ」

「いきなり名前呼ばれ……て、なんだ、お前か」

まさかクラスメイトが来るとは、ここは顔見知り遭遇率高いんだな。

「てか、一人で喫茶店？ 何か悲しくない？」

「いきなりひでえな！？ 第一よく見ろよ、一人じゃねから」

「ん？」

よく見えなかったが、後ろにもう一人いた。

「こ、こんにちは」

「あ、中紫」

またクラスメイトだ。

ということとはつまり……

「野郎2人で喫茶店？ それはそれで……はっ」

思わず鼻で笑ってしまう。

「おいおいそれで良いのか店の人！」

「剛、あまり騒ぐと他のお客さんに迷惑だよ？」

「大丈夫だよ中紫、ご覧の通り他に今お客いないし」

手を払って後ろを指す。ついさっき出ていったからね。

「ま、騒がしいのは良く無いけど、とりあえず……」

一応、お客だし。

「いらっしやああせー」

挨拶はしておこう。

2人はカウンターに通した。この方が楽だし、何より、

「……………後、6分か」

それで終わりだ。

勝手知ったるクラスメイトだし、途中で抜けたって文句は言われな
いでしょ。

とりあえず注文取って通したし、出来るまで軽くダベろうかな。

と思って2人の方を見ると……

「？」

あれ？ 西金いないや。トイレかな？

まあ、それはいいや。気になるのは、残ってる中紫の方だ。

一人カウンターに座る中紫は、何やら斜め上の方を見ていた。その
先には店の棚があるけど、閉まって中身までは見えない。まさか
棚の模様に見とれてるとかないよな？

車に跳ねられて記憶喪失になってからというもの、中紫は更に変わ
った気がする。

たまに、ああして虚空を見ることが多くなった気がするんだよな
……まあ、元から変わってたけど。

西金とかと一緒にいるのは分かるけど、D組の黒石とかと居ると普
通にそぐってたのが、今じゃ妙に見える。それぐらい、中紫は変わ

った。

「……」

アタシが訊いたところで答えられる訳無いか。

注文の品が出来た、アタシはなるべく気配無く近より、

「お待たせしました」

隣に来てから声を出した。

「!？」

中紫はかなり驚いた。それだけ上の空だったんだろう。

「あ、ありがとうございます」

注文の品を置く。

「てか今さらだけど、どうして野郎2人で喫茶店？」

「あ、えっと……」

ちよっと視線が泳いでるな。

そりゃ普段話さないけど、クラスメイトだよ中紫？ あの時自己紹

介もした。

「剛が、補習で疲れたって言うから、ちよっと駅前まで付き合ったんです」

「へえ、それでここに入ったと」

「はい、人気だと聞いたことがあったので」

「ふうん……」

随分と話し方まで変わったよな、中紫。

てことは、アレも忘れてるんだろうな……

「……」

「あの……大丈夫ですか？」

「え……？」

おっと、心配されてしまった。

「別に、何でもないよ」

「はあ……」

ふむ……どうやら本当に忘れてるようだね。

まあ、いいや、忘れたらならそれで、アタシは覚え続けるけどね。

「頑張れよ、中紫」

「え？ は、はい」

ふむ、こういうきょとん顔は向こうであり得なかったしな、こっちはこっちで面白いかも。

「お、もう来てるじゃん」

あ、西金戻ってきた。

「大変だねえ中紫も、西金に付き合ってここまでなんて」「え？」

「補習するぐらいなら、勉強した方がいいよ、西金」
にやり顔で西金を見る。

「う、痛いところ……そ、そういうお前はどうかんだよ？」

「見て分かんないの？ バイト出来るぐらいは西金より優秀だよ」

「は！ そうか……けどな！ 俺だって本気でしたら負けないぜ！」

「その本気とやらを補習の前に出さなきゃ」

「その本気を補習の前に出そうよ剛」

おお、中紫と意見が合った。

「うっ、晶にまで言われるとは……いったい何を吹き込んだ！」

「あ、時間来た。マスター、アタシもうあがりますね」

「スルーかよ！？」

「そんじゃね、中紫、また学校で」

「更にムシか！？」

「はい、また学校で」

懷中時計を持った手を振って、アタシはその場を後にした。

「おつかあしたー」

更衣室で会った里桜に今の状況の説明と、でこぴんをしてから帰った。

喫茶店には、今日も人が集う。

〈喫茶〉cross〈精霊〉（後書き）

なぜ雇われたのか……そこを疑いたくなりますね
しかし、知り合いのバイト先に行くと、妙な雰囲気になります。
皆さんはどうでしょうか？

それでは、

感想お待ちしております。

〜喫茶〜 **c r o s s** 〜迷路〜 (前書き)

喫茶店第3弾。今回は迷い路話と繋がるお話

〈喫茶〉cross〈迷路〉

カランコロソ

「いい、いらっしやいませー」
お客様だ。えっと……

「なな、何名様ですか？」

「2人です」

「き、喫煙席と禁煙席がござ……」

「禁煙席でお願いします」

「は、はい！」

「はふう……」

やっと休めたよう。やっぱりお昼時は込むんだな。

それに、今はランチタイムサービスとして軽食を頼んだお客さんにはコーヒーマービスがあつて、たまにどっちだっけつてなるから……はふう。

やっぱり大変だな……でも、お母さんとお父さんのお店。私も手伝いたいんだもん。

「よし、がんばるぞう」

注文の品が出来た。お盆に乗せて持っていく。

「お、お待たせしました。クラブサンドになります」

「ありがとう」

「ご、ごゆっくりどうぞ」

よし、出来た。

今の人は常連さんだから渡しやすかった。

確か、サンドさん？　だったかな？

常連さんにはあだ名があつて覚えやすいから、あまり緊張せずにい

られるんだけど……初めて来た人とか……言い方は悪いかも知れど、ちよつと変わった人とかはすつごい緊張するんだよね……はふう。玲亜ちゃんはすごいよな、誰にでも変わらず接客して……

こんな願いはいけないかも知れど……今日は普通の人だけが来ますように。

カランコロソ

お客様だ。

「い、いらっしやいませー」

「すみませーん、知り合いが来てませんか？」

……願いは叶いませんでした。

すつごい変わった女の子、多分私より一つか二つぐらい年下で、妙な格好をしている。

縦線と横線で出来たの模様、チェックとは少し違う、例えるなら……迷路？ そんな柄の服と帽子の女の子だった。

「え、ええと……」

この子の知り合いっぽい人は……お店の中を見回しても見当たらない。向こうから呼んでいる気配も無い、つまり……

「い、いらっしやらないようですが……」

「ありや、私の方が早かったのか、じゃあ待たせてもらえますか？」

「は、はい！」

ええと、まずは……

「お、お客様は何名様ですか？」

「へ？ 私一人だけど？」

「あ……」

そりゃそうだよ！ 女の子は知り合いが来るのを待ってるんだから！

ああー私のバカバカ！ て、今はそんな場合じゃないでしょ！ 次は確か……

「き、喫煙席と禁煙席がございますが」

「あはは♪私未成年だよ♪」

「あ……」

あーまたやっちゃったよう、私より年下っぽいから未成年に決まってるのに……

「あ、でもちょうど空いてるっぽいからカウンターに行っていていいですか？」

「は、はい、こちらへどうぞ……」

「はふう……」

さつきから失敗ばかり。せっかく頑張ろうと思い始めた時なのに……

あ……あの子の注文した物が出来た。持ってかなくちゃ。

お盆に乗せて、女の子の所へ、

「お、お待たせしました」

「ありがとー♪」

ちゃんと置いて、えっと……

「ご、ごゆっくりどうぞ」

よし、言えた。

「あ、ちょっと待って」

「はひい!？」

呼び止められた!？

「今大丈夫っぽいし、ちょっとお話ししない？」

「お、お話しですか？」

確かに今はオーダーも無いけど……

「そ♪ダメ、かな……?」

上目遣い、カウンターの少し高い位置の椅子に座ってるからちよつと無理やりにして訊いてきた。

か、かわいい……

「は、はいい……」

「やった♪」

あれ？ 今私、何を？

「良いお店だね♪ココ」

「え？ あ、ありがとうございます……」

「お客さんも何だか面白い感じの人が多いし♪」

お客様が？ そ、それは何て返せば……

「何より！」

急に女の子に指さされた。

「は、はひい！？」

「お姉さんが一番面白い！」

「わ、私ですか？」

「そうだよ！ おどおどとしたウェイトレスさんなんて初めて見たよ！」

お、おどおど……

「……」

私は肩をすくめた。

「ありゃ？ どうしたのお姉さん？」

「……はふう」

そうだよね……こんなあわあわでどどどな私がウェイトレスなんて、お店の手伝いなんて……

「別にあわあわとは言っていないんだけど……ああお姉さん、元気出して！ ほらこれ食べていいから」

女の子が渡してきたのは、自分で注文した物だ。

「いえ……大丈夫ですから……」

貰う訳にはいかない。

「あー……ねえねえお姉さん」

「……はい？」

尋ね返すと、女の子は私の肩を両手で掴んだ。

「その自分の欠点、治るとしたら……どうする？」

「え……？」

私の欠点が……治る？

「自分のいやーな部分。一つや二つある筈だよ♪何故なら人間何だもの♪」

あなたも人間じゃ……

「ねえ……私に、任せてみない？ ……あは♪」

真正面にじつくりと、女の子は私を見る。

その瞳に、私はまるで吸い込まれて……

カランコロン♪

「!？」

ドアベルの音、お客様だ。

「あ！ 来た来た。お〜い♪」

女の子が手を振っている。見てみると、

「おや？ ワタシの方が遅かったようだな」

女の子の知り合いらしい人が立っていた。女の子と同じような変わった格好だ。

「待たせたようだね」

女の人……だよな？

「ぜんっぜん♪でもすごいタイミングだったね。今まさにだったのに♪」

た、タイミング……？

「そうか、だがもうダメみたいだな」

だ、ダメ……？

「問題無いよ♪ここ気に入ったから、迷わすの可哀想になったし」

「ほお……メイコにも人を思う気持ちがあったのか」

「えー、それどういう意味ー？」

「気にするな、他者に対した一人言だ。にひひひ、」

「ぶーぶー」

「あ、あの……」

何だかおいてけぼりだ。

「おや、すまなかったな。ワタシは彼女の隣で良いぞ」

「え？ は、はい……」

それからしばらく、2人は何やらお話しをして、帰っていった。

「また来るね♪」

この言葉通り、女の子……メイコちゃんと、（後から知った）女の人（名前は分からない）はよく来るようになった。

いつ来てもあの格好で、いつも私とお喋りして帰った。

そのおかげで、お客様と話すのも少しだけ慣れる事が出来た。

けど、3ヵ月くらいした頃かな？

2人は来なくなった。

玲亜ちゃん達に聞いたら、そんな人達見たこと無いと言われた。どうやら私がシフトの時だけ来ていたらしい。

……今、どこで何をしているのかな？

喫茶店には、今日も人が集う。

く喫茶くcrossく迷路く（後書き）

ギリギリセーフ、な話でした。

彼女たちも人と変わらず喫茶店に行くんですね。

感想及び評価、お待ちしております。

ひな祭り大作戦〈side里桜（前書き）

3月3日、この日に起こる。3人の少女を中心にした物語。
これは、その1ページ。

ひな祭り大作戦 side 里桜

「ひな祭りやろうよ！」

わたしは玲亜ちゃんに提案した。

「……………はあ？」

予想通り玲亜ちゃんに聞き返されたので、もう一回。

「だから、ひな祭りだってば！」

今日は3月3日、つまりはひな祭りですよ！

「……………誰が？」

「わたし達が！」

わたしと、玲亜ちゃんと、瑠音ちゃんも呼んで…

「……………何処で？」

「はっ！」

そうだった。まだそれを決めてなかった。

えーっと……………あ！

「瑠音ちゃん家で！」

わたし冴えてる！ 瑠音ちゃん家ならひよつとして、

「雛祭りフェアでも提案する気？」

「それだよ玲亜ちゃん！」

ぱん、と両手を合わせる。

「ひな祭りフェア！ マスターに提案してみよう！」

「という訳ですよ！」

さっそくやって来た瑠音ちゃんの家にしてわたしのバイト先である喫茶店のマスター、瑠音ちゃんのお母さんにひな祭りフェアを提案した。

「ひな祭りフェアですか、良い発想だとは思いますが、それは実現出来ません」

「ええ!？」

否定されてしまった。

「こうなるだろうとは思ってたよ」

玲亜ちゃんがやれやれといった感じに首を振った。

「少し時間がいりますね」

マスターがどこかへ電話をかけ始めたので、玲亜ちゃんに訊いてみる。

「玲亜ちゃん、何か知ってるの？」

「まあね」

「えっと……」

玲亜ちゃんから聞いた言葉に慌てて店を飛び出してみたは良いものの、

「どうしようかな……」

一応商店街を歩いてみるけど、やっぱりいろんなお店があるな。思わず目移りしていると、

「り、りおちゃん」

「お？」

振り向いて見ると、瑠音ちゃんだった。

「どうしたの？」

「り、りおちゃんさっき、何か言おうとしてなかった？ 玲亜ちゃんが連れて行っちゃったけど」

「あゝ、それは……」

そこでわたしは気付いた。これは……瑠音ちゃんに言ってはいけない気がする。

「それは？」

瑠音ちゃんが首を傾げる。

「え、えっと……」

何とかごまかさないと。

「きよ、今日のバイトをさ」

「え？ 今日私は私と玲亜ちゃんの日で、里桜ちゃんは休みじゃなかった？」

「あ」

そういえばそうだった！

えっと、じゃあこの言い訳はダメだから……

「そうじゃなくて……」

「そうじゃなくて？」

「あう……」

「？」

何にも思いつかない……

こ、こうなったら。

「あ！ アレ何だろう！」

瑠音ちゃんの後ろを指差す。

「え？」

瑠音ちゃんがそれに振り向いた。

瞬間、

（瑠音ちゃん、ごめん！）

わたしは走り出した。

「ふへえ……」

何とか逃げ出せたけど。とりあえず……

「あれ？」

ここ、何処だろう？

無我夢中で走った気がしたから……ひょっとして、隣町？

あ、でもちょうど良いかも、ここには向こうとは違うお店がある筈だし。

時間を考えて……電車に乗れば結構見てられる。

「よし」

さっそく見て回る事に。

ふむふむ、やっぱり向こうとは並びが違うね。

きよろきよろしながら歩いていると、

「あれ？」

前から生徒が歩いてきた。アレは、この辺りの高校の制服だ。

そして、わたしに気付かずに歩いてくる生徒の顔がはっきり分かり、

「あー！」

わたしは走って近づいた。

「あら？　里桜？」

それは知り合いで、

「ぴかり〜ん！」

ハイタッチするつもりで手を挙げて近づくと、

「その名で呼ぶなあ！」

パン！

「はう！？」

予想外に強い力で手を弾かれた。

「いった〜い」

「全く、久しぶりに会ったと思ったらいきなり大声であの名前を……て、里桜、どうしてここに居るのよ？」

「ぴかり…光こそ」

途中すっごい睨まれたので言い直した。

「私は学校帰りにちよっと寄り道してるのよ」

「へえ」

「で？ 里桜はなんで？」

「わたしはね…」

わたしは事情を話した。

「ふうん、じゃあ良い場所があるわよ」

「ホント！」

「ええ、案内するわ」

光の後に続いた。

「そういえば光、不思議は見つかった？」

光とは中学校がいっしょだった。その時に聞いたんだけど、光は不思議な出来事を探しているんだとか。

まあそう簡単に見つかるとは思ってないけど。

「……ふふふ」

光は怪しげな笑みを浮かべた。

「光？」

「里桜……私ね、見つけたのよ」

「へ？」

「見つけたの、そう、見つけたのよ！」

握りこぶしを作ってガッツポーズ。本当に嬉しそうな表情をした。

「へ、へえー……」

テンションの高さにさすがのわたしも少しひいた。

「……でもね」

ところが一転、光の声が暗くなった。

「そう簡単に、良い事ばかり起きる訳じゃないわよね」

遠い目をする光、何だか悲しそうな目だった。

「光……？」

「……なんてね、冗談よ、不思議も見つからないわ」
でも次の瞬間には笑顔になっていた。

「もうすぐ着くわ、きっと良い物が見つかるわよ」

わたしは光の教えてくれたお店で目的の品を買い。駅で光と別れて電車に乗った。

思ったより時間を使った、電車を降りたら猛ダッシュしなくちゃ。よし、待っててね、溜音ちゃん！

「まだかな、まだかな？」

「落ち着きなよ里桜、焦ってクラッカー鳴らさないでよ？」
時計が6時ちょうどを示した。

その時、扉が開き、溜音ちゃんが入って来た。
今だ！

パン！ パンパン！

「はひい！？」

クラッカーに溜音ちゃんが驚いた。

「「誕生日おめでとう！」」

「え……？ あ……」

わたしも今日の今日まで知らなかった。

まさか、今日が溜音ちゃんの誕生日だったなんて。

「ほら溜音、ぼさっと突っ立ってないで入りなよ」

「はい溜音ちゃん！」

私はプレゼントを瑠音ちゃんに渡した。

「誕生日おめでと〜!」

「ちょっ、里桜、渡すタイミング早いって」

「……」

その袋を見て、

「うっ……」

瑠音ちゃんは急に泣き出した。

「瑠音ちゃん!？」

まさか、プレゼントが気に入らなかった？

けど、

「あ、ありがとう……玲亜ちゃん、里桜ちゃん」

瑠音ちゃんはわたし達にお礼を言った。

わたしのプレゼント、瑠音ちゃんはとっても気に入ってくれた。

さすがは光だ。

そういえば、何か不思議を見つけたとか、冗談だよとか言っていた
ような……

……まあいつか。

今は、瑠音ちゃんの誕生日を盛り上げなくちゃ!

ひな祭り大作戦\side里桜(後書き)

この物語は、3人の少女が主役。

これはその1ページ。他のページも、どうかご覧下さい。

もしくは全てを見たアナタ、
感想、お待ちしております。

ひな祭り大作戦〈side 瑠音（前書き）

3月3日、この日に起こる。3人の少女を中心にした物語。
これは、その1ページ。

ひな祭り大作戦\side瑠音

「……はふう」

今日の授業が終わった。

さてと、早く家に帰ってお手伝いしなくちゃ。

鞆を持って廊下に出る。

昇降口へ向かっていると、

「るゝおんちゃゝん！」

里桜ちゃん走って来た。

「どうしたの？」

「あのね、瑠音ちゃんの家でひなま…むぐ！」

言い切る前に現れた玲亜ちゃんが里桜の口を手で塞いだ。

「れ、玲亜ちゃん？」

「ごめん瑠音、なんでもないから」

「う、うん……？」

「むぐぐー！」

そのまま里桜ちゃんは玲亜ちゃんに引きずられて行ってしまった。

「？」

何だったんだろう？

早く帰ってお店の手伝いしないと、私は足早に帰路についていた。
その時、携帯の着信音が鳴った。

「？」

いったい誰だろう？ ディスプレイを見てみると、

「お母さん？」

確か今仕事中のはず。

「もしもし？」

『あ、瑠音?』

「どうしたの?」

『ちよっとね、今日何の日だか分かる?』

「今日?」

今日は……3月3日。

「ひな祭り?」

『そうそう、だからさ、ちよっと帰って来るのを遅らせて』

「え?」

帰って来るのを遅らせて?

「な、何で?」

『何でも、そうだね……』

お母さんは近くにいた誰かと何やら話して、

『6時ちようど、その頃に帰って来てくれる?』

「え? ええ?」

『それじゃ、よろしくね』

「えっ! ちよっとお母さん!」

通話が切れてしまった。

「……」

いったい何があるんだろう?

でも、6時ちようどか……携帯の時計を見る。

……3時を少し回ったところ。

後3時間、どうしようかな……

とりあえず商店街へ来てみました。

3時間、何をして過ごそうかな。等と考えながら歩いていると、

「あれ?」

前に里桜ちゃんを見つけた。

そういえば、さっき里桜ちゃん何か言おうとしていたような……玲

亜ちゃんに引きずられて行っちゃったけど。
もう一回聞いてみようかな？

「り、りおちゃん」

名前を呼びながら駆け寄る。

「お？」

里桜ちゃんは振り向いて止まってくれた。

「どうしたの？」

「り、りおちゃんさっき、何か言おうとしてなかった？
玲亜ちゃんが連れて行っちゃったけど」

「あゝ、それは……」

「それは？」

「え、えっと……」

？ 何だか口ごもってるけど……

「きよ、今日のバイトをさ」

「え？ 今日私は私と玲亜ちゃんの日で、里桜ちゃんは休みじゃなかった？」

「あ」

しまった。みたいな顔に里桜ちゃんになった。
いったいどうしたんだろう？

「そうじゃなくて……」

「そうじゃなくて？」

「あう……」

「？」

「あ！ アレ何だろう！」

里桜ちゃんが私の後ろを指差した。

「え？」

それに振り返る、特に変わったところは無いけど……

「何を見たの？ 里桜ちゃ……」

前を見ると、

「あれ？」

里桜ちゃんの姿が無かった。

「？」

どこに行っただろう？

里桜ちゃんは見当たらず、私は一人時間をつぶしていた。

後1時間くらい、でもこの辺りは回ったし、後はどうしようかな……

「……」

でも、お母さんも、玲亜ちゃんも、里桜ちゃんも、急にどうしたんだろう？

まるで、私に何か隠し事してるみたい……

「はふう……」

思わずため息が出る。

みんな、どうしたんだろう……

その時、

「どうかしたの？」

声をかけられた。

声に顔を上げると、前に女の人が立っていた。

「何だか悲しそうだったけど、何かあったの？」

「い、いえ、あの、その」

わたたと手を振って否定する。

「良かったら、私に話してみない？」

けど女の人は私を心配してくれているようだ。

「は……はい」

私は頷いてしまった。

近くにある公園へ行き、私達は並んで座った。

「それで？ いったいどうしたの？」

「あの……」

私はみんなの事を話した。

「なるほど……妙に避けられてるように感じる、か」

「……本当なら、今日バイトの日だったのに、急に帰りを遅らせろって」

「へえ……」

女の人は何かを考えるように顎に手を当てて少しすると、

「ふふ、なるほどね」

くすくすと笑い出した。

「え？ ええ？」

訳が分からずパニックになる。

「6時には帰るように言われてるんでしょ？」

「は、はい」

「じゃあ大丈夫だよ、6時にいつも通りに帰れば、全部分かる筈だから」

「は、はい、ありがとうございます」

ぺこりと頭を下げる。

「気にしないで、何だか、放っておけなかったから」

「放って？」

「私ね、人を探しているんだけど、どことなく似ている気がしてね」
そう言って女の方は立ち上がり、私にある物を見せた。

それは、十字架のペンダント。飾り気は無く、十字架と鎖だけのペンダントだ。

「……」

「……違うか」

「へ？」

「ごめん、気にしないで」

女の方はペンダントを閉まった。

「それじゃあね、ちゃんと6時には帰るんだよ」

女の方は立ち上がり、行ってしまふ。

「あ、あの！」

私は慌てて立ち上がり、女の方を呼び止めた。

「わ、私の家、この辺りで喫茶店を開いてるんです。い、いろんな人が集まるから、もしかしたら探してる人が居るかも……」

「……」

女の人はきょとんとした。でもすぐに笑い、

「ありがとう。今度、行かせてもらおうね」

手を振って、

「お友達の事、信じてあげてね」

公園を出ていった。

私もそれに振り返し……

「あ……」

名前、聞いてなかった……でも、きっとまた会える筈だよね。

「……そろそろ、6時かな」

私は帰路へと着いた。

いったい、みんなは何を考えているんだろう？

扉の前で、6時にちょうどになるまで待ってみる。

あれ？ プレートがCLOSEをこちらに向けてる。まだ閉める時間じゃないと思うんだけど……

時計が6時ちょうどを示した。

私はおそろおそろ、扉を開けた。

パン！ パンパン！

「はひい！？」

いきなりの音に驚いた。

けど、前を見ると……

「「誕生日おめでとう！」」

「え……？ あ……」

ああ、そうだった……

私、今日誕生日だったんだ。

「ほら瑠音、ぼさっと突っ立ってないで入りなよ」

「はい瑠音ちゃん！」

里桜ちゃんにラッピングされた袋を渡される。

「誕生日おめでとう！」

「ちよっ、里桜、渡すタイミング早いって」

「……」

里桜ちゃんから渡されたプレゼント。

奥にいる玲亜ちゃん。その隣にはケーキがあつて……

「うっ……」

思わず私は涙を流していた。

「瑠音ちゃん！？」

「瑠音？」

「あ、ありがとう……玲亜ちゃん、里桜ちゃん」

私は2人にお礼を言った。

「うん！」

「うん、どういたしまして」

私はあの人の言葉を思い出した。

『お友達の事、信じてあげてね』

そう、2人は私にとって大事な友達だ。

疑うなんて、絶対に出来ないよ。
だって、こんなにも優しい友達なんだから。

ひな祭り大作戦〈side瑠音（後書き）

この物語は、3人の少女が主役。

これはその1ページ。他のページも、どうかご覧下さい。

もしくは全てを見たアナタ、
感想、お待ちしております。

ひな祭り大作戦〈side玲亜（前書き）

3月3日、この日に起こる。3人の少女を中心にした物語。
これは、その1ページ。

ひな祭り大作戦 side 玲亜

「……………はあ？」

いきなり現れた里桜の発言にワタシは聞き返した。

「だから、ひな祭りだってば！」

あー……聞き間違いじゃなかったか。

確かに今日は3月の3日、雛祭りだ。イベント好きの里桜だからなにか言ってくると思ってはいたさ、

「……誰が？」

「わたし達が！」

その中にワタシがすでにカウントされている事も。ただし、

「……何処で？」

「はっ！」

何処かは未決定なんだよな。

しかし、雛祭りか……里桜の奴、ひょっとして知らないな？

「溜音ちゃん家で！」

溜音家とは、ワタシ達のバイト先の喫茶店の事だ。

「雛祭りフェアでも提案する気？」

一応訊いてみる。

「それだよ玲亜ちゃん！」

案の定、手をぱんと合わせて閃いたみたいな顔をする。

「ひな祭りフェア！ マスターに提案してみよう！」

……はあ、里桜の奴、本当に知らないんだな。

という訳で、ワタシ達は溜音の家に向かう事に。

「あ！」

その道すがら、というかまだ学校から出てない廊下で瑠音を見つけた。

「るゝおんちゃゝん！」

里桜が瑠音に向かって走り寄る。

アイツ……まさか！

「あのね、瑠音ちゃんの家でひなま…むぐ！」

やっぱり、言い切る前にワタシは里桜の口を手で塞いだ。

「れ、玲亜ちゃん？」

「ごめん瑠音、なんでもないから」

「う、うん……？」

「むぐぐー！」

むぐむぐ唸る里桜を引きずりながら瑠音から離れた。

「ひな祭りフェアですか、良い発想だとは思いますが、それは実現出来ません」

「ええ！？」

否定されて里桜はショックを大袈裟に現した。

「こうなるだろうとは思ってたよ」

本当に知らなかったんだな、里桜。

「玲亜ちゃん、何か知ってるの？」

「まあね」

マスターが電話をかけ始めたので、ワタシが説明する事に。

「瑠音の誕生日なんだよ、3月3日、雛祭りの日がね」

「ええ！？ そうなの！？」

「そうなの、だから雛祭りよりも瑠音の誕生日プレゼントを考えなよ」

「よーし！ そうと決まれば早速！」

切り替え早いな、里桜はすでに頭の中で瑠音の誕生日プレゼントを

考えている事だろう。

ま、ワタシはもう用意してあるけどね。

「玲亜ちゃん」

マスターがワタシの名前を呼んだ。

「なんですか？」

そういえば今日バイトのシフトだったつけ。

「瑠音の誕生日、何時頃にする？」

「あー……そうですね」

ワタシは懐中時計を開いた。今の時刻、3時を少し回ったところ。

「6時ぐらいでどうっすか？」

「よし、それで行きましょう」

マスターは電話にその時間を告げていた。相手は瑠音か。

「という訳で里桜、3時間後に始めるからその間に考えなよ」

「ええ！？　じゃあわたしちよつと探して来る！」

言うなり里桜は店を飛び出して行った。

やれやれ、瑠音と会って誕生日の事バラさなければいいけど。

こういう時って、妙に人が出会うんだよね……

「ふふ、これは面白い誕生日になりそうね」

電話を置いたマスターが楽しそうに笑っている。

「里桜がいるからですか？」

「それもだけど、瑠音、自分が誕生日なの忘れてるみたいなの」

「……マジっすか？」

「マジもマジ、大マジよ、今日は何の日か聞いたら、『ひな祭り？』

だって」

うわぁ……まさか自分の誕生日も忘れるとは。

瑠音。ひよつとしたら里桜よりも心配かもしれない。

カランコロン♪

「ありゃあとござーしたー」

今出ていった事で、店の中にお客が居なくなった。

懐中時計を開く……5時か。

ふう、本当なら瑠音もいたから半分の仕事で済んだ筈だけど……まあ、誕生日なら仕方ないか。

マスターだって、今日は手伝わせないように遅く帰るように言ったわけだし。

「玲亜ちゃん」

マスターと呼ばれた。

「はい？」

「今日はもう閉めましょう、プレート回してきて」

「はい」

扉に近づき、OPENをこちらに向けて、CLOSEにする。

後は、瑠音の誕生日の準備をして……

「あ」

そうだ。瑠音へのプレゼント、家に置きっぱなしだった。

「マスター」

ワタシはマスターに説明した。

「では、帰り道にケーキを買って来てくれますか？」

バスデーケーキか。

「分かりました」

手早く着替え、さっきCLOSEにした扉に向かう。その時、

カランコロン♪

ドアベルが鳴り、誰かが入って来た。

「あ、すみません。今日はもう店閉めたんですよ」

ちゃんとCLOSEを見ろっての。

本音を隠して建前を言うと、

「あ……」

「あ」

その人と目が合った。

しかもその人は……

「……久しぶり？」

「……」

「……どうしたの？」

「……そっちこそどうしたんだよ？　ワタシはもう持っていないぞ？　ワタシはもうアレをアンタに渡したんだから。」

「ん……分かってる」

「じゃあ、どうして」

「まだこの辺りにあるからよ」

電話口を通したような声が答えた。

「ああ、箱もいたんだ」

「誰が箱か！？」

「どう見たって箱じゃん。箱を箱って言ってなにが悪いのさ」

「ガーーー！」

箱が怒った。それをムシして、

「さっきも言ったけど、今日はもう閉めたの。また日を改めてよね」

「ん……分かった」

やれやれ、そりゃ臨時休業だから分からなかったのは仕方ないけどね。

「……」

だが、扉を出ずにワタシを見ていた。

「なにさ？」

「……楽しそうだったから」

「なっ！？」

「……アレを持っていた時よりも、今の方が楽しそう」

「……」

ああそうだよ、あの時より、今の方が全然楽しいさ。……なんて、面と向かって言える訳ないじゃんか。

だから、

「そうっすか？」

誤魔化した。

「とにかく、ワタシは用事があるんでコレで」

そのまま横を抜けて、店の外へと出た。

「……」

「まだかな、まだかな？」

「落ち着きなよ里桜、焦ってクラッカー鳴らさないですよ？」

懐中時計も見る。6時ちようどを示した。

その時、扉が開き、溜音が入って来た。

パン！ パンパン！

「はひい！？」

クラッカーに溜音が驚いた。

「「誕生日おめでとう！」」

「え……？ あ……」

予想通りにぽかん顔だ。

「ほら溜音、ぼさっと突っ立ってないで入りなよ」

「はい瑠音ちゃん！」

里桜がプレゼントを瑠音に渡した。

「誕生日おめでと〜！」

「ちよっ、里桜、渡すタイミング早いって」

「……」

その袋を見て、

「うっ……」

瑠音は急に泣き出した。

「あ、ありがとう……玲亜ちゃん、里桜ちゃん」

そして泣きながら、瑠音はワタシ達にお礼を言った。

「うん、どういたしまして」

ワタシは、あの人を思い出した。

……今の方が、全然楽しいよ。

だって、友達の誕生日をちゃんと祝えるんだから。

瑠音。絶対に良い誕生日にしてあげるからね。

ひな祭り大作戦\side玲亜(後書き)

この物語は、3人の少女が主役。

これはその1ページ。他のページも、どうかご覧下さい。

もしくは全てを見たアナタ、
感想、お待ちしております。

く取説くcrossく景色く(前書き)

久方のIf・Cross

今回は新しいメンバーたちのつながりを、

〈取説〉cross〈景色〉

よく晴れた朝、いつも通りの時間に登校していると。

「おはよう、取説」

意外な人物に会った。いつもこの時間には見かけない筈だったのに。

「珍しいわね、遅いじゃない」

いつもなら蛍奈は朝早くに行って、部室でなにかをしてからホームルームぎりぎり前にクラスに現れる。なにをしているのかは、考えたくない。

「気付いたのよ。わざわざ部室でなくても、家の部屋で書いてから行けば、とね」

今さら気付いたのか。

「ふーん」

じゃあこれから会う可能性が増えるかもなのね。

「ところで、取説」

「なによ」

「いい天気ね」

「見て分かるじゃない」

いきなりなにを言ってるんだ？

「でもよ、アレを見なさい」

「？」

蛍奈が指差したのは前、そこには生徒が一人歩いている：

「え？」

歩いてはいる。けどその生徒が持つ物に私は驚いた。このいい天気の中、前に行く生徒は傘をさしていたからだ。

「妙ね、雲一つ無い晴れの空よ」

「日傘とかじゃないの？」

「だとしても、学校に日傘をさしてくるなんてあり得る？」

「……」

まず無いわね。持ってたとして、さしてこようとはまず思わない。
「ふふふ、ひょっとしてワタシ達にぴったりの生徒かもしれないわよ」

「私を混ぜないで」

成り行きで入部してしまったが、同類で考えてほしくはない。

「よし、勧誘するわ」

蛍奈が一人早足で向かった。

「ちょっ、待ちなさい」

私は後を追った。

すると、

「え？」

頭になにか当たった。上を見ると…

「……雨？」

蛍奈に、もっと言え傘をさす生徒に近づく程に雨が降ってきた。
確か、天気雨というやつだったと思う。晴れの時に降る雨の事だ。
もしかしてあの傘は、天気雨を予測しての物なのか？ いや、天気
雨を予測出来る訳が無いわ、なにか他の理由がある筈よ。

「そのアナタ」

天気雨に濡れるのも気にせず蛍奈は生徒に声をかけた。

「はい？」

傘が振り返り、生徒の顔が見えた。制服の感じから、一年生の女子
だと思う。

「アナタ、部活には入っているかしら？」

いきなり勧誘する気らしい。

「はい、入ってますよ」

だが生徒はすでにどこかの部員だった。

「あの、濡れてますよ」

「大丈夫よ、それよりアナタ、この雨が分かって傘を？」

「そういう訳じゃないんですが……まあ気にせんで下さい。では、」
頭を下げると、生徒は歩いて行ってしまった。すると、雨が急に止

んだ。

本当に、あの子の回りでだけ雨が降っているかのようにだった。

「なるほどね……」

なにかを分かったように蛍奈が呟いた。

「コレも、繋がりの一つという事なのね？」

「は？」

「気にする事無いわ。行きましたよ取説」

そのまま蛍奈は行ってしまった。

「……？」

さっきの言葉、どういう意味なのかしら？

く取説くcrossく発明く（前書き）

5月の8日、今日は――――

〈取説〉cross〈発明〉

「取説、ちょっと良いかしら？」

教室を出ようとしたところで蛍奈に止められた。

「なによ、私急いでるんだけど」

今日は特別な日だ。それは私だけではない筈だけど、こんなに急ぐのは私ぐらいだろう。

「依頼なら一人でやってよね」

「今日は依頼も発明も取扱説明書も関係ないわ、ちょっとした質問があるの」

質問？ どうせまたあの時みたいに訳の分からない事を…

「今日って、母の日よね？」

……え？

「え、ええ、そうね」

蛍奈から意外な単語が飛び出した。

確かに今日は5月の8日、母の日だ。クラスメイト達の会話に耳を傾けてみると、

今日母の日だよね？

何か渡すの？

とりあえずカーネーションだよな？

という会話が聞こえてくる。私が急いでいたのもそれが理由だ。

「それでね取説、母の日って具体的にどうすれば良いのかしら？」
「は？」

母の日をどうすれば良いのか？

「そんなの、日頃のお礼を言ってカーネーションとか渡すんじゃないの？」

私だってそのつもりだ。

「……なるほど、さすがは取説ね、説明が上手いわ」

「それ、ほめてないわよね？」

「もちろんよ、嫌味と取るのがいいわ」

やっぱりいつもの蛍奈だわ。

「……でもね、ワタシだって人の子よ。ちゃんと母だっているんだから」

瞬間、声のトーンが真剣なものになった。

「普段はマッドサイエンティストだけどね」

たった一瞬だったけど。

蛍奈は私の横を通って教室を出ていった。

「……」

あの一瞬の言葉、妙に引っ掛かるわね。

私は蛍奈の後を追った。どうせ行く先は同じ昇降口だ。

隣に並び、さりと訊ねてみる。

「蛍奈のお母さんは何をしてるの？」

さっきの言葉がそういう意味なら、蛍奈はこの質問に答えるはず。

「ワタシの母方の祖父母が発明の種という物を造ったのは知ってるわね？」

食い付いた。

「ええ、何十年前前に流行ったっていうアレね」

「発明の種はとてつもない売れ行きを見せた……けどそれは不良品だったのよ」

そういえば、ある時から発明の種が姿を消したという話を聞いた事がある。

「ソレを回収しているのがワタシの母よ」

「……」

予想が無かったわけではないけど、まさか本当にそうだったなんて……

しかも、回収しているのが、と蛍奈は言った。

「義務教育、ワタシが中学を卒業するまでは普通の主婦をしてたわ。でもワタシがこの高校で寮生活をするようになってからまた始めたのよ」

つらつらと、普段の蛍奈から想像出来ない饒舌で語り出した。

「はつきり言って無謀な数発明の種は世界にばら蒔かれたわ。けれど母は一人、聞いた話では協力した誰か……いえ、何かがあるらしいけど、今もまたその物と一緒に東西を回ってるの。それを知っている父は母に国内を任せて、自分は国外へ出て探しているのよ。更に広い範囲をね」

昇降口へ向かいながら、蛍奈は自分の親子関係を語っていく。

「ワタシだって昔からマッドサイエンティストだった訳じゃないのよ。思い返してみれば、構ってもらいたくて発明を造り出したのかもしれないわね」

昇降口を出て、校門に向かっていく。

「今日ね、ちょうど母が家に帰ってくるから。母の日の何かをしようと思って取説に聞いたのよ」

「……」

校門を出た。

そこで今まで黙っていた私は口を開いた。

「蛍奈」

「何かしら？」

「アンタって人は……どうしてそうあっさりと嘘を言えるのよ？」
気づいたのはかなり最初の方だ。

蛍奈は、寮生では無い。だからさっきの、この高校で寮生活をするようになってからというところは全くの嘘だ。

「ふふふ、さすがは取説、騙されないのね」

にやりと蛍奈は笑った。

「母の日を聞いてきたのは、わざわざ嘘を言う為だったっていうの？」

「勝手付いてきたのはアナタの方よ、ワタシはただ話しただけ」

「……やっぱり、アンタは変わり者よ」

「ええそうよ。何故ならワタシはマッドサイエンティストだから」

そう言い残して、蛍奈は言ってしまった。恐らく母親の待つ家へと「……」

蛍奈が寮生なのは、嘘だ。けどその後の言葉は、正直分らない。声こそいつもの蛍奈だったけど、語られたあの言葉はそう簡単に造れるものではない筈だ。

つまり、あの言葉が全部本当だとしたら……

「……私も急がなきゃ」

とりあえず頭の片隅に追いやって、私も帰路についた。

……今日くらい、親子仲良くしなさいよね。

〈取説〉cross〈発明〉（後書き）

本日は母の日、何か書こうと考えていたらこれを発見して作品にしてみました。

彼女の母は、今もなお続いているかもしれない。けどそれは嘘かもしれないし、本当かもしれない。

どちらにせよ、本日が母の日なのは本当なのです。

それでは、

〈迷路〉cross〈発明〉

なに？ コレをある人へ届けろ？

別に構わないが、なにやら珍しい仕事だな。

まあ、たまにはこういうのも悪くないが。

ん？ ああ、メイコならば向こうで眠っていたから、鏡を見たらそこはアメリカ、な顔にしておいた。

いやいや、星条旗とは顔のような凸凹のあるところには描きにくいものだね。にひひひ、

では、行ってくるとするよ。

「この辺りだと聞いたんだが」

普段はメイコの役目である仕事を、今回珍しくワタシに回ってきた。まああの本人は顔に星条旗だし、双子はまだ初期段階で難しい事は出来ない、コレも半分個で持とうとして割るかもしれないから、消去法でワタシになるわけか。

「ん？ アレか」

前に行く後ろ姿を発見、聞いた通りの姿をしている。

「さっさと渡して、帰って絵を描くでしょう」

足早に近づいて声をかける。

「そこを行く人」

「？」

振り向いた彼女、

「!？」

の顔を見たワタシが驚いた。

目を丸くしかけたが、バレてはマズイのでぐっ、と冷静を保つ。

しかし……なんでこの人がココに？

「……何か？」

「! あ、ああ……」

ヤバイ、ワタシから呼んでおいてこの表情は非常にヤバイ、だが仕方ないだろう。まさかこの人だとは思わなかったのだから。

「……あれ？」

彼女はワタシの顔を見て首を傾げた。

「……貴女、ひょっとして……」

「!？」

ま、マズイマズイマズイ、明らかにバレてる、バレてしまっている。何か何とかどうにかこうにか誤魔化さないと……

カチン

その時、ワタシの中で何かのスイッチが入った。

「……七内さ……」

「はーはっはっはっ!」

「……?」

急に高笑いをしたワタシに言葉を止めて首をかしげる。
今がチャンス!

「ワタシの名は奇才・イロドリーナ！ 本日はアナタへ特別な物を届けに参上した！」

「……特別な、物？」

「コレだ！」

渡せと言われていた物を放り投げると、彼女は上手くキャッチしてくれた。

「……コレは」

「集めているのだろうか？ ワタシには不必要だから求める者へ送ろうと思っただけだ！ ではサラバ！」

やるべき事をして、必要最低限だけ伝えて、ワタシは逃げるようにその場を去ったのだった。

「……今の、人って……」

「はー……はー……はーっ……」

焦った、こうなってから今までで一番焦った。

メイコや双子に見られてないのが幸いか。

見られてたら双子には疑問がられて、メイコには笑われてその顔にユニオンジャックを描き足してしまうところだったな。

「……ふう」

ああ名乗っておけば、先輩もワタシだとは思うまい。変わり果てた姿になったのは、お互い様のようだが、やりたくてやってる事だ。言う資格も言われる資格も無い。

先輩が先輩の選んだ道を行くように、ワタシは、ワタシの決めた道

を進むだけだからな。

「……ふむ、我ながら言っていてハズイな」
また聞かれてなくて幸いだ。

きつと双子にはカッコいいと、メイコには似合わないと言われ、その顔に日の丸……と見せかけたサウジアラビアの国旗にしてしまいそうだな。

「やれやれ、次からはメイコを起こして必ず行かせるとしよう……
どんな方法を使っても、にひひひ、」
そうでなくては、ワタシの身が持たないからな。

〈迷路〉cross〈発明〉（後書き）

予想外の繋がり、実は彼女はそういう人間だったのです。という感じの物語になっております。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6935p/>

If・Cross Story

2011年11月2日19時07分発行